

展覧会 & イベントレビュー

三井 知行

大阪新美術館建設準備室学芸員。
1968年青森県八戸市生まれ。原美術
館とその分館のハラ・ミュージアムアーキ
テクニカル勤務を経て、2002年より現職。

enoco [study?] #2 展覧会

堀川すなお 解釈と行為 SEEING AND PRACTICING

(2015年1月10日～1月24日)

巨大な作品、壁を埋め尽くす数の絵画や床に溢れるオブジェといった、見る者を圧倒する展示がある。そのとき心に聞こえてくる音はどんなものだろうか。鬼気迫る激情を訴える展示なら、大瀑布や荒波のような音かもしれない。一方で、群衆が一齊に囁いているような、または枯葉を踏んで歩くような、ひそやかだが複雑な音のこともあるだろう。

enoco[study?] #2における堀川すなおの展示は、まさに後者の典型的であった。

壁一面に貼られた数多くの「作品」は、そのほとんどが青い色鉛筆による精緻な線描で、離れて見ると青い薄霧のようにも、細かく青い壁のヒビのようにも見える。作品の多くは、作家が独力で制作したものではなく、ワークショップや対話と言った他者とのコミュニケーションの中で制作されたものである。

堀川すなおは「目の前にあるものを見て理解する」という、日常的で無意識的な行為に意識を向け、そのものの「本来の姿」について探求する。哲学的と言えるその探求は、しかし言葉だけではなく、科学のように実験、観察、そして描画と、手と目を介して行われる。

これまで主に一人で探求を積み重ねてきた堀川が、やがて他者（の認識）とへと意識を向けるのは当然の成り行きであり、「他者に対してひらいでいくこと」で「アートの可能性」を研究(study)する本プログラムは、まさに渡りに船だったようだ。

プログラムではアトリエ公開やワークショップが行われたが、アトリエ公開は単なる中間発表ではなく、訪問者と対話し、時には簡単なワークショップを行う研究の場として機能していた。ワークショップに至っては、ワークショップとは何か、リサーチするところから始めている。

これら他者の介入する制作に共通しているのは、対象物について、言葉による外見の「説明」、ものを見て得られる「視覚情報」、その「名称」の3つのうち、1つあるいは2つの情報だけで制作が行われる点である。例えばホッチキスを描くのに、形のみを説明した言葉をもとに描く場合と、その説明にホッチキスであるという情報を加えて描く場合、直接目で見て描く場合の3つが対比される。こうして得られた数多くの描画は、もはや作家個人の作品ではなく、また、作品というよりもむしろ実験結果というべきものである。

しかし、それらを一堂に並べた成果展を見れば、作家の探求に対する答えが得られるわけではない。むしろ作家の問いは、他者の介入でより深く複雑なものになっている。研究(study)することによって問い合わせ(=?)が深まるというのは、[study?]というタイトルに対して出来過ぎの感があるが、丁寧に個々の作品を見ていくれば、この問い合わせが知的な楽しみに満ちたものであることに気がつくはずだ。



展覧会風景
photo:Takuma Uematsu



展覧会風景
photo:Takuma Uematsu



アトリエ公開・中間レビューの様子
(2014年11月29日)